



忠勇阿佐倉日記

初編

一



18 時
883
1



門
號 883
卷 1

忠勇

阿佐倉日記自叙

明治
五月
十日
購

稗史小說廢于江都而攝坂大行

矣於是浪華書賈不厭於遠訪於

茅舍也委之若干卷焉多年之拙

工猶不捨焉者官競開於卷也頗

似興於面而得遠境之寵耳喻之

草木枝葉繁茂根却枯則不能無



遺憾矣然這般寶集堂託阿佐倉
日記稿為其書也公歲辛亥當時
流行之雜劇也既受或人著小冊
子頻婦幼之愛翫矣是以書賈以
為稗史益有榮乎則事及焉余欣
然採筆對机案不隔晝夜先案地
理考於人物一編之趣向既成矣

雖然鄙俚猥雜實燈下之戲墨也
非有所取者只以勸懲之意存而
漫欲免費梨棗之譏而已矣

昔嘉永壬子仲秋望

積翠陳人保題并書



烟出於
火非火
之和
情生
於性
非性
適之



高須佐次兵衛
虎次郎

河左衛門 刀編卷之二

高須佐次
虎次郎



勝間田上組の庄屋
重三郎

絹屋
喜代平
女見
蘭

阿右衛門 糸糸巻之二



富山の近臣
 遠田嘉門
 女児衛後小
 阿千代と改む

や
 ら
 せ
 の
 け
 り
 け
 り

河左衛門尉



披
 垂
 之
 衣
 之
 帯
 則
 天文
 清

澄
 風
 觀
 水

川
 流
 則
 平

後撰集
 兼補

心
 の
 け
 り
 や
 ら
 せ
 の
 け
 り

近江阿佐倉の郷の長
 花井當左門の子
 當吾道雄

平介

ロ



南威青琴
 校治之極
 而必候
 盛飾
 以增麗

千葉忠藏
 恒治



杉山
 花井當左門
 道郷

當左門
 阿種家

忠勇阿佐倉日記第一輯全部五卷總目錄

第一 花井當吾々囊祖の由來 真砂衛ヶ落魄の話說

第二 賢松密の武藝を習ふ 少年古館の怪異と觀休

第三 妖魔を退治て芳名を輝かす 郊原の白骨夢中小現休

第四 慈父善を責く子を諭す 師命に因て西雄義を結ぶ

第五 朋友を劾す當吾黄金と調ふ 檢非違使の廳に喜代平を救ふ

第六 阿佐倉の祭祀角舐興行 蘭密の虎次郎を恋ふ

第七 春心一ふ動く佳人の情 才子道を述て媒を諭す

第八 處女筆を彈き後患を醸す 義漢途に未通女を憐む

第九 孝女天より福を降す 才子佳人と天縁を結ぶ

第十 貨財小誇り婚儀を促す 情小迫つて才子危きを救く

忠勇阿佐倉日記初輯卷之一

東都

松亭金水編次

第一 花井當吾々囊祖の由來

真砂衛ヶ落魄の話說

古への語ふいそ。其聚斂の臣あらんより寧盜臣あることや。と盗臣の内
の害あてその災ひいと凄く聚斂の始め。君と利まの忠あるふ他て居甚
多死災害の臻るを以て賢人への滅しむるとい切なり。然りと久と老人の
さその君の府庫と倍を。と重やそ民を利せは君も是を賢るると
多て財用の是と上目と。とさ。と人へのさあは。再求李氏は。とありて
聚斂して李氏を富む。故に孔子穢りあり鼓を鳴して是を攻ふ。と師の門

安んず寝食とも安んぜり年来日未信しぬる神佛と念すの才不換
 ての輕微も利益ありて是れを不重しせめぬのたまはば今の非君も親と
 慙て一同の裡不閉終り乳母の他の人ありとえぬこととあるは、あまの
 の在まこと、何とあらう此方なるの人日え落し、あまの親を
 とるふついで、各福世の在まると漫不親なるなりあり、かくて忠平の
 非君の人並るぬ疾病おついで、世の人云のわやくと密に信すと懣悞お
 不て一時密不道種と在、這回非の煩ひの尋常の疾ひあり、佛家新
 習因果ゆて罪障消さるるなり。然ると只管も不溺ま佛不親の神
 と瀆して、行るとも甲斐あらん若し渠と敏より出、行山里不隨居を
 目、村名と勢とて、後世と當む尼法沙とるるなり、あまの才、然る

近江朝倉の郷の系肝へ日程をさび、湖水不望しふ不射し、いと閑棲の傍
 地ゆて、多も父祖より、莊屋のまじ、彼如へ閑居させんと、人固より
 貌の醜と怖て、汝もが体小人とをささぐ、汝も何の罪も多、猶所不赴く心
 地もまてくいと、任るぬ人ども、非が朝暮の看病と做して生涯と仕
 まるるの、汝も支拂の体あり、心得長くと厚き命然あり、人とも
 らの支拂一日も非不離ま、まて心ありと君命の斯の如くありし、
 忽地異業、多く煩業し、まてささるる敏と鋪理あり、洗し、あまの
 支拂のちの体あり、二人の奴婢とあるて、まて年月と送りあり、且暮不
 後世菩提と行るの外、体ありあり、然る不報のちの年、二十二年、あまの
 益疾の重し、白きく、竟不空を、世とまめぬ、まて不修行、人支拂、只空哀

教しやうひふふよりより威いを増まし人ひとの神かみの加か獲とくふふよりより榮さかふふかかまま六む神かみ威い新あらたふ
 志しをを靈たま利り益えき炳ひ然ぜんううりりかかくくてて若わか人ひと丈だけ婦むがが中ちゆうふふ男なん女にょ之の人ひとのの志し
 徳とくてて初はつみみのの妻さい次じをを清きよふふのの家け跡あととと纏ちんりりけけりり是こゝよりより教しやう多たのの事ことをを
 とと行ゆてて人ひとのの世よのの人ひとをを以もてて地ちのの種たねをを沿ま革くわししてて持もつつててええるる田でん舎しゃのの
 増ぞう減げん盛せい衰すい交かうあありりとと行ゆるる地ちとと立たつつてて今いまのの當あたりりのの道みち行ゆるる
 三十さんじゅう余よ代だいのの孫そん小せう及およぶぶ故ゆゑ小せう舊きゆう家けととのの以もてて當あたりりのの孫そん也なり明めい神しんのの因いん祖そ
 不ふままあありりけけしし人ひと取とりり悔くわいららばば小せう妻さい左さのの夫ふのの齡ねいはは十じゅう小せうああよよ
 びびてて男なん子しあありり故ゆゑ小せう松しょう古こ明めい神しんへへりりてて一いつ子しとと徳とくけけるるがが生なまままととあありり
 尋よ常じょうのの事ことををおおふふいいささうう殊ととあありりてて夫ふう婦ふうのの歡あはびび大だいととあありり月げつとと花はな
 とと既すで排はいてて名なとと賢けん松しょうとと号ごうししもも年ねんをを成なり人ひとのの後のち賢けんととのの祝いわ詞ことば也なり

實じつ小せう光こう陰いんのの三さん安あん春しゅん秋しゅう松しょう小せう更せいままりりてて賢けん松しょうのの十じゅう采さい小せうたたりりぬぬままのの
 二に三さん年ねんあありりてて湖こををささるる弘こう福ふく禪ぜん寺じのの世よのの香かう華け院いんあありりてて小せう
 當あたりりのの住ぢゆう職しやく鐵てつ牛ぎゆう禪ぜん師しのの道みち徳とく四し万まん小せう波はええ博はく識しやく多た能ねいのの和わ
 尚なほあありりてて小せう特とくてて手て讀よみををおおいいせせ且かつ讀よみ書かきるるととせせららるる小せう圓えんとと
 恰さ剛こう賢けん松しょうををままりりてて也なりのの由よしととささくく彰あきららししめめるるとともも小せう圓えんのの功こう也なり
 二に三さん年ねんあありりてて今いまよりより己おのれがが侍さむらいへへああららははるる夜よる昼ひるととあありりてて學まなぶぶべべききのの
 あありりてて學まなぶぶととももあありりてて一いつ内うち又また小せう潭たんととあありりてて小せう當あたりりのの由よしととあありりてて
 忽たち地ぢ議ぎひひささりりけけししのの夫ふとといいははるる賢けん松しょうとと寺じへへ呼よぶぶ世よ扈こ從じゆうのの如ごとくく禪ぜん師しのの
 侍さむらいをを召めい仕しひひのの暇ひまあありりてて禪ぜん學がく同どうままにに禪ぜん家け悟ご后ごのの徑みちとともも向むかひひてて小せう鏡きやう
 波は世よ一いつ支し年ねんととささりりてて干かん茲こゝ同どう小せう任にん居きるる常じょう化けのの形かたち常じょう太たい身しんもも其その

めをまわす。初る小女の年六十のりやとて人の女。その容障り
 終とも。髪は蓬ふらち乳。衣の影離て破ふあふ。荒布不似ふとて
 纏ひ。十葉をうらうら女童の母子とてを母と與ひ。是もその容障り
 傍に在て泣の叫び。疥と鼓。腹と推し。病と看。病その凡情いと哀
 まふ。程小愛た。あつた。いなく。多う。什麼。汝を。何処の。老。ま。何
 方へ。性。あ。あ。ま。わ。小。做。病。や。死。茶。や。あ。と。銀。小。い。と。受。て。女
 常の。匹。と。擡。げ。こ。ま。と。初。て。こ。ま。の。妻。母。小。は。り。日。未。持。病。不。瘡。あ。り。今。日。の
 寒。さ。で。暴。小。死。す。や。々。雅。俊。不。及。べ。も。温。湯。一。杯。を。沸。き。元。來。某。の。持
 あ。い。こ。び。辛。ト。は。つ。と。海。も。苦。顔。を。せ。む。致。あ。り。且。其。の。容。の。氣。さ。り。て。人。の
 と。初。の。初。え。い。と。ま。由。あ。り。人。の。い。め。り。や。何。小。の。哀。ま。あ。り。と。ま。と。と。漫。小。便。り。

思ひけ。小頼。小奴。小分。付。て。自。湯。と。把。よ。せ。貯。へ。の。茶。と。出。て。與。ふ。小。女。の。童
 い。か。戴。進。め。ん。と。ま。ま。と。ど。その。母。の。齒。を。嚙。り。て。口。と。開。く。小。童。の。い。よ。く。狼。狽
 惑。ひ。て。さ。ふ。便。溺。を。失。ふ。在。る。小。恐。び。む。や。ひ。け。ま。ら。小。奴。と。て
 病人。と。門。内。へ。昇。入。す。柴。小。屋。へ。連。由。ま。り。延。救。多。を。受。く。さ。ね。その。上。小。麻
 さ。う。の。程。近。る。医。師。と。把。手。や。此。と。あ。ま。の。療。治。し。て。と。特。め。バ。医。師。も。言。と
 得。て。懐。き。把。出。ひ。滅。せ。彼。方。此。方。へ。利。け。し。は。その。奇。特。な。程。も。多。く。眼
 と。う。ち。突。き。四。下。を。視。て。怪。む。仲。小。女。の。童。の。箇。指。く。ら。う。と。若。く。も。老。女。の。徳
 よ。う。掌。と。合。せ。て。拜。む。の。と。物。の。い。え。ん。か。く。て。妻。女。の。婢。女。小。指。揮。と。粥。と
 住。ま。て。多。く。遠。う。の。味。噌。桶。小。漬。う。ら。瓜。の。香。物。の。底。の。馨。し。梅。枝。で。ん
 扱。由。ま。り。社。小。副。て。渠。等。小。供。ふ。ま。ら。老。女。の。更。小。の。惠。と。感。た。る。涙。と。

滝と流きて且くの物の給へど居たり。婢女ども口を冷てい何の在
 もあ。とやく給よと初むる小去来とて母子著せり。所戴きて衆生のあ
 こと俱小自粥のあを胸小感とり。かて痛もすく小治まをけれど此
 日未弱る乳力小ち出。とて入維く又えけまの當なるの程憐ま火
 かど共えて柴小屋小の夜伏さす。翌の日初静とて入るふえあ得と癒
 するはあふち歎び再び兩個をく初ふ。を合まをさ人柄あふいゆるは
 細で初をう。零落うやと向かまが老母いとも慙らひる。面持とていひ
 ける。惟令道路小偃死。さるこも身の素性を人あいの下鳥游なるこ
 ち以定りあのま。歎ひあさる慈悲をうけ。向ふことを答へるの恩をさぬふ他
 なるあまが。果まはば信りまうよとて妻が良人の畠山家小叔代仕る武士とてを

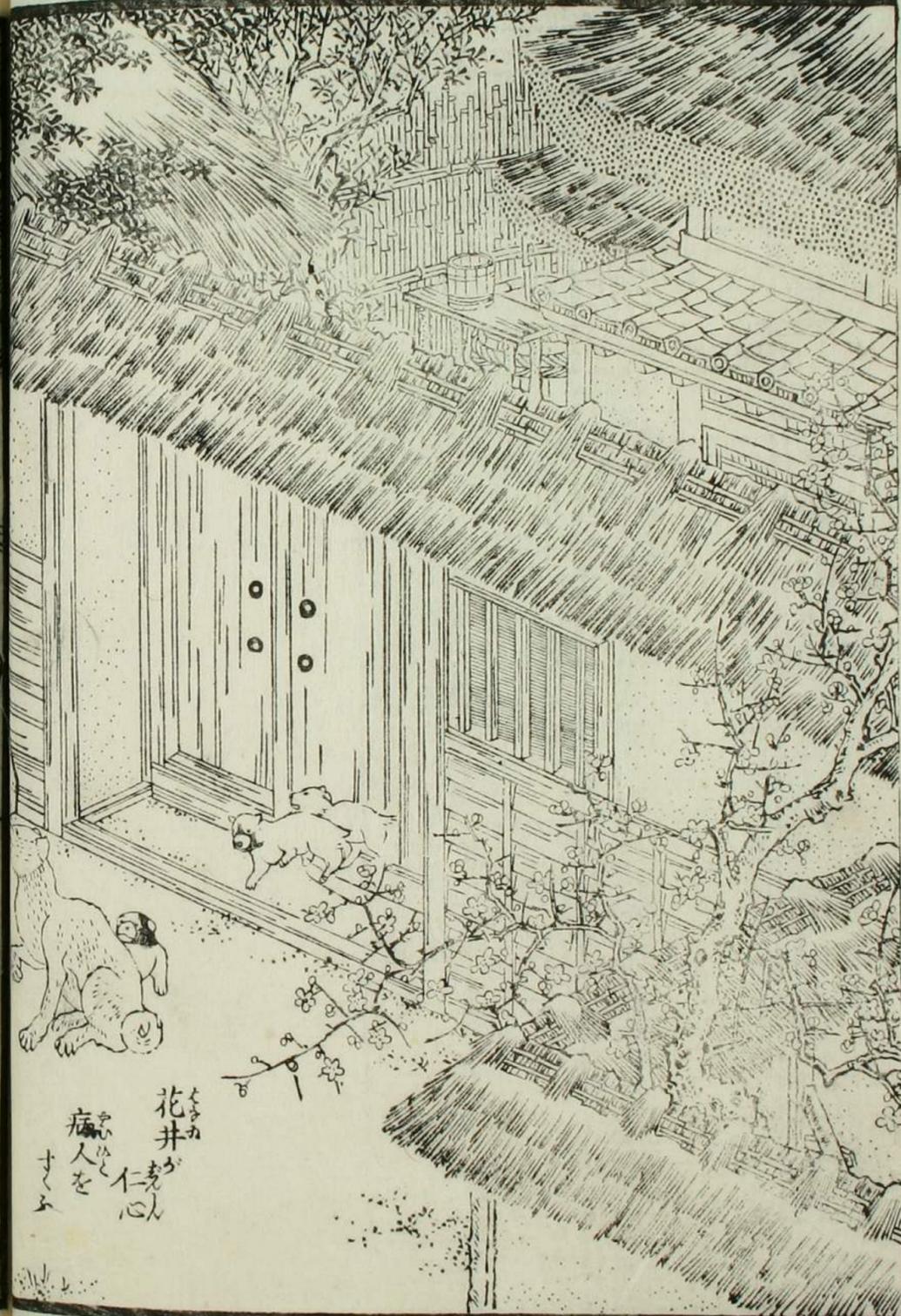
田ま如門とまじり。近おの辰小擇もさて。刀祿のゆきええの流うひされが
 多入もともあて。せと送り修り。小運回側室のこふよりて刀祿のゆひ
 着るわが折と練め。とあまこ。一点さうも用わらまびあ門のその性一徹
 老竹と竹う本と本とさる。心ぞあもる友。故かると再三再四面犯
 と練めあけま。刀祿あは太く怒りあひ。老后号を閣て。君へ對し先礼とて
 其夜死を賜ひ。うの君と練めて容らま。死まの園より青憶といと潔く
 腹かき切て。朝の露と消失。うの途小送る。吾もあ個途方ふら。歎きの中
 片時もこふあま。とて家財と収む。暇もあ。逐拂ひまをまのま。迷ひ
 出が何の方へ。と流へき充のあ。ねども東小い。さる知者あま。見小便を
 需めと。とふか。ととるぬ。旅彼方此方と呻吟て。此頃続く。苦勞小救回



花井

花井

花井



花井
仁心
痴人を
すくふ

再説花井賢松の弘福禪寺小寄宿之。師の傍小後ひ。夜くまき。こ
 ろ。讀書多讀小勞とて厭ふ。励て是と學ひける。かの月宿る常太
 郎が。とく勇と異小挂人巴と慢ぶるとある。強句あいかげとこと。何
 と。この心悟く。あふふよとて。思惟。いふも。當内。或る。動され。聞
 緯。我王。徳。く。世。る。ふ。く。所。の。農。民。さ。り。も。一。郷。の。長。方。身
 あり。武。藝。も。竹。心。教。む。の。己。守。る。小。不。足。多。然。り。と。て。ま。ま。を。表。小。た。く。
 學。ぶ。ん。も。ま。く。鳥。濟。と。あ。い。さ。ま。え。若。し。密。小。學。を。ん。め。と。心。小。収。め。肝。の。傍
 始。り。同。宿。る。若。し。も。あ。い。心。預。あ。り。朝。倉。の。後。ち。松。虫。の。林。へ。修。る。る。り。
 と。傍。り。若。し。寺。を。之。出。辛。淡。の。斤。傍。小。山。濟。見。新。と。い。る。浪。人。の。武。州。若。あ。り
 と。傍。り。も。知。る。は。是。小。便。王。太。刀。の。法。ま。半。弓。の。射。ある。と。折。小。學。あ。り

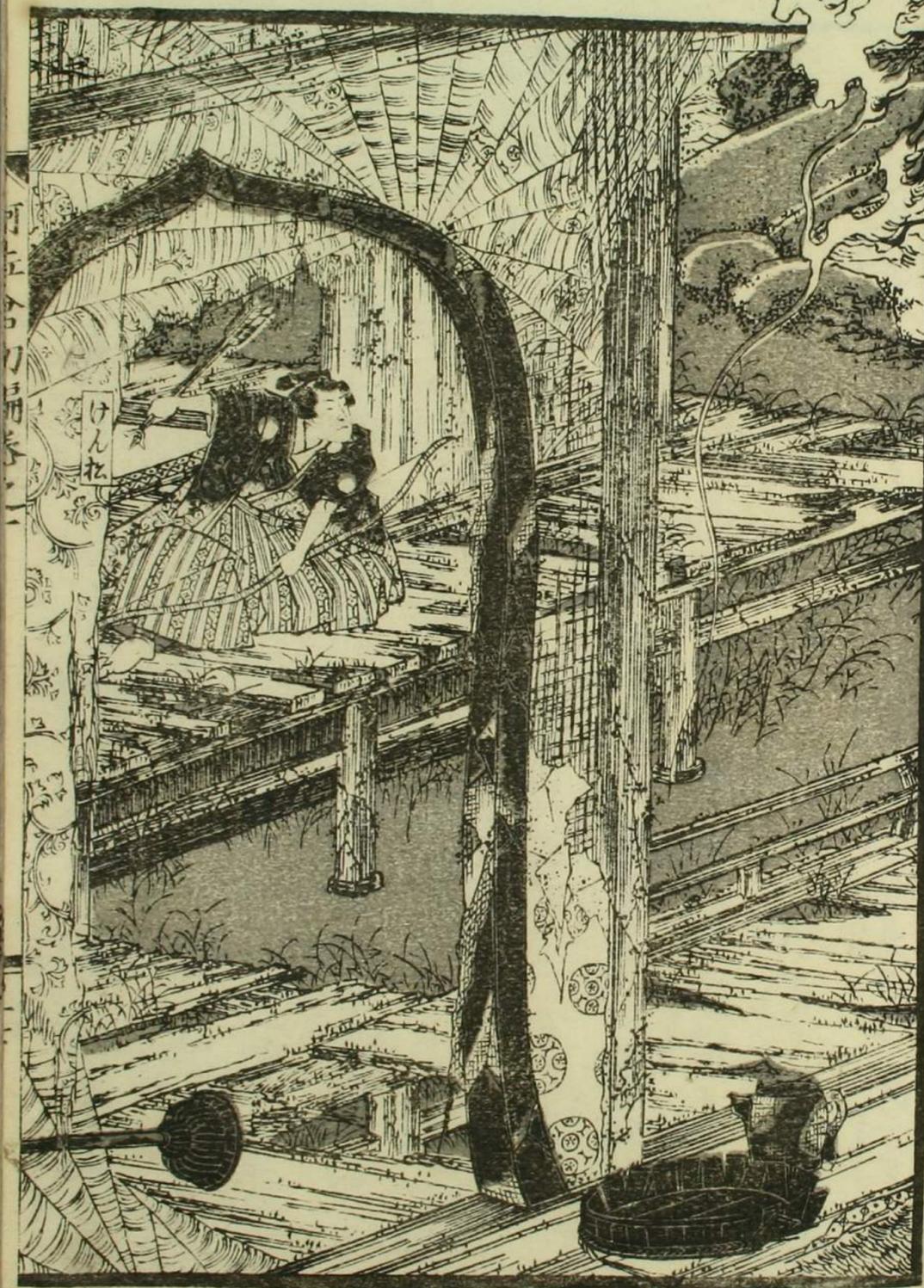
け。つ。天。性。才。智。の。少。年。も。是。の。日。あ。る。び。て。粗。と。ま。と。通。曉。兩。三。年。の
 學。び。る。若。し。も。上。小。多。く。見。新。大。小。歡。び。て。ま。あ。く。ち。あ。ゆ。り。傳。え。る。然
 け。と。賢。松。の。更。小。面。小。え。の。は。物。を。教。て。内。端。小。て。人。と。お。と。争。ふ。と。あ。り
 常。小。腹。も。あ。く。ふ。い。と。あ。り。猶。常。太。弟。の。兄。腐。を。編。む。と。も。屢。多。く
 か。く。て。一。夜。の。と。あ。る。今。日。の。寺。の。岡。山。忌。と。て。講。中。を。え。と。朝。生。が。な。り。
 集。會。て。齋。の。准。備。と。り。日。中。に。講。の。近。や。う。と。茶。路。の。人。の。野。あ。り。と。も
 小。廣。さ。り。の。寺。の。書。院。小。書。院。内。玄。關。庫。裏。本。堂。の。更。小。も。い。は。り。用。和。屋
 茶。の。間。も。人。充。滿。と。あ。り。齋。と。給。へ。念。佛。と。り。晡。時。の。比。及。あ。り。と。も。四。方。へ
 散。り。て。ゆ。く。迹。小。殊。る。講。中。の。取。取。る。七。八。是。等。の。常。小。性。を。ひ。て。心。易。さ。り。茶
 の。間。へ。あ。り。と。も。今。物。を。太。く。骨。折。し。る。若。し。旁。を。射。し。酒。版。と。初。め。後。牛。和。尚。の。自

罵りて波火へ焼く。其夜中までも塩へひきこむ。怪異の有らば
 ねど遠くも通れぬ。う海へ入ると人々を元の子宿へ歸すもそれ
 何方ともなく消しつゝの嗟悼しき物語。霖雨降て寂しき夜中の燐火
 おまじも燃ることを方うも秘する。この波怒魂のさす不為ありと
 信じて種々侍の人々開け努む。儲かすまで已む親しき甲乙も。既小燐火と
 するとのんまぐ。執程ある。物さす不為ありぬと。姓昔名する。四
 天王綱公時など。世もあつた。世もあつた。世もあつた。世もあつた。
 世もあつた。世もあつた。世もあつた。世もあつた。世もあつた。
 在り。忽地小阿と。ちち笑ひか。四天王の故事。小阿と。碑小阿と。人の
 よく。物新めく。鬼神のあつた。世もあつた。世もあつた。世もあつた。世もあつた。

人間の馬物の霊長みく。物さす不為ありぬ。然るに。物の為小阿と。人の
 ままに。制せらるべき。及。理ありぬ。恒ある。物の為小阿と。人の
 腹さす。自ら怪異と。視るとあり。ま。物の為小阿と。人の
 ままに。近曾人の話。説と。安小阿と。洛世野の大徳寺。小宗純と。若
 僧あり。その人。万福人。小阿と。師の。四坊。人折。小阿と。呆。斗。里。奇。若
 あり。行。性。末。の大。智。徳。と。あり。の。人。と。人。の。ひ。あり。然。る。小。阿。と。子。舎
 小。在。て。火。と。黒。と。線。と。小。眼。と。曝。と。坐。し。け。る。が。不。安。を。對。ひ。て
 叙。す。と。ま。ま。の。十。二。さ。う。の。童。何。方。と。も。あ。く。来。て。坐。せ。り。その。容。常。の
 ぶ。く。あ。つ。た。顔。の。大。さ。さ。の。ゆ。く。ま。も。額。小。一。目。あり。て。大。さ。の。と。四。の。と。う。
 光。の。宛。然。電。光。の。掣。綱。小。異。る。と。ひ。汲。け。ぬ。と。ま。ま。の。忽。地。這。る。氣

いと大膽不信心と決し。彼講中が喰ひ荒せし。東西と庖厨へ運ぶ序不暇
と酒菜の残まるの密小己が子舎へ入是頓て自身密版を捲へかの酒菜を
法俱小割筋へ捲て秋小包とこまと今宵の料としてとち出べき唯恐るは
さて賢松の先刻より。月一処のめ小まらて。その同答も具小空づ。常太郎が
例の廣玄心悟しとわりの不ど小叔ある人小戒めし。そは後の更小物も
いそねど心中不平と懐くの初静。ゆふまらやとあ後小心を着て候ふ小
残りの飯りて割筋を仕立心急る。景勢と密小秘をてて入京院書院へ
玉置のめ斗をえる小今すく成刻あり。まご早けしど竹の坊の旁とて疾小
憩まはし。吾も人々小暇を乞へ。階房へ入ると此方来て。月宿の傍甲し小
暇と告て階房へ入る。ねと小常太郎の密を小。その準備を急げし。この裏の

方より忍び出かの辛傍の傍る。古館を序して急ぎゆく。年小似げたる
大膽不故。凡のありびとあはし。かくて常太郎のた急ぎ。ゆき。彼処小
あつ著し。比のそやまの刻あり。今いまより夏困て。皐月の末小あつる。
夜風の猶も身小濡とつ。蕭しくと物凄く。殊小夏州生後了て入べき
踏ご小多か。四方黯りて更小若也申辨まわら小倍する。不る。
と惘然として寝ざし。居やう。その以の僻く。空の志。このふうち曇り。淵然と
あて降来る。雨小並もろく。衰も若。この序。あつる。と。候と。あつる。と。
探りて。まろ傾ける。檐の下小溜り入。て候ふ小。教年。露。あ。朽。これ
どろ。得。大厦の浪。残とて。度ら。あ。一。向。あり。崩。さ。あ。も。屋。根。あ。は。ぬ。
と。凌。ぐ。小。み。の。足。り。ぬ。程。眼。を。定。めて。よく。視。ふ。椽。の。板。の。折。り。朽。損。よ。て。その



川橋宗利繪之二

折へ入る来べき筈もあつた。さうして他方の人もあつた。渠のあつたぬは必定之を、亦
 彼妖魔の朋友もあつた。心と地とを近づかせる計策の究まらぬさうさうと、
 合入るべき隙と探して出て来よ。と罵る声も賢松へ、茲由とそあつた。彼の人
 と漫不可笑さと思ひ、笑ふ声も馬と破とをいふく人の声も、妖魔
 としてのあつた。然るゆゑも不剛あり。さうして掛て又人と形と改まらぬ
 賢松の賢松刀を袖に似せ、花井をいふあつた。と声けらして賢松へ最
 陰火のまうめて居所とを知らせ、徐々と歩みさう。さうして賢松の
 足下をふら来て、刃の妖魔と試さんとする。さうして賢松も、若くは俱ふ来て、朋友
 の好方にあつた。さうして軍の先鋒も、休む暇もなく、休む暇もなく、休む暇もなく、
 脚板の人のあつた。病の俱ふ味も、是らと、能く悔つた。あつた。

さう足下が為体心悟しと名ふさう。心と名て僕へ必く一人来て、本事の
 程と輝え胸中ありと察する。在りも、早く憩むと人あつた。附房
 小入。準備整へ足下と名て、さうして出さう。さうして、さうして、
 逃足出ても、さうして、さうして、さうして、
 万一、強さ敵あつた。さうして、さうして、さうして、
 馳着て、さうして、さうして、さうして、
 虫物の傍へ傍ら、容貌と、さうして、さうして、
 と、さうして、さうして、さうして、
 戴き、さうして、さうして、さうして、
 他、さうして、さうして、さうして、

りやう。然いそまて今更小回答の初もあたまを小慚て面あれた心地せり。人と
知らざる不孝の罪の儀。まことやして祝免しめんと詞を卑し謝しなむ。賢松
の微笑て。賢兄さのまゝ慙あひを在下ら未る。今く是中も恨と述て
争りんとる。今あむひ今言せし閣思君あり。実の噂小言あふ。扶魔館へ
唯一人。さう頼めり。その勇氣とて尋常の人ふあむ。日未の廣云。虚しくぬ。
大丈夫あて在まま。故のふく変化とさけ。過あとの。いそまて。若
仕損ふ事とありて。方小災害のあむ。悔とも道らぬ。不為あむ。過す
性て人志。さび万一難儀のともあむ。援とありて。朋友の。涙とまんと。心ま
あり。勢と是中の功と奪ひて。吾身を降らん。心あむ。其まて。そを悔めり。
足下が此処等。小在ま。と。粗知らぬ。彼処小。唯と。その動靜と。候ひ。る。小

心ひも傍らぬ。一室の。陰火ふより。面と合し。心の底と。告るあり。何の。鬼も
あむ。推しえ。あむ。得物の。何ぞ。噴ま。歎と。之が。此方の。刀の。体小。得物の。あむ。
あむ。びとの。人。然る。見。新先生。授けら。さ。る。半弓。両個。が。向。へ。閣。て。足
下。ふ。ま。れ。吾。ふ。ま。れ。その。城。小。應。用。ふ。べ。と。あ。半。弓。小。矢。と。副。て。あ。個。が。傍
近く。へ。む。賢。松。再。び。ま。う。す。や。う。ん。そ。世。間。の。僻。と。て。多。と。好。む。い。る。と。あ。人。情。世
古。館。の。その。始。め。多。くの。人の。強。死。志。る。あ。と。以。て。好。む。の。志。行。ふ。の。ひ。旬。る。その
虚。小。衆。と。て。狐。狸。あ。む。ひ。の。山。猫。あ。む。ど。の。人。世。小。衆。む。む。と。陰。敷。共。の。怪。異。と。あ。む。
あ。む。え。う。勿。論。鄭。の。伯。有。等。が。故。事。あ。む。と。あ。り。と。い。と。人。の。天。地。小。性。を。票。て
あ。む。く。天。命。あ。む。と。あ。む。り。よ。人。の。為。小。害。せ。ま。ま。の。自。身。又。小。伏。非。命。小。終
了。と。取。と。ま。り。人。の。恨。と。世。の。怨。と。ん。全。く。死。す。と。小。及。び。て。い。長。生。と。い。へ。と。も

六通と得て五百里外と隊（い）する。秘（ひ）するもの（もの）の（の）力（ちから）候（ま）り。さ（さ）ふ（さ）於（お）て（て）自（みづか）ら（ら）居（ゐ）る
 秘（ひ）邪（よ）正（ち）と感（か）ん（ん）と（と）の（の）入（い）り。然（しか）し（し）も（も）の（の）鬼（おに）魄（はく）の（の）い（い）ま（ま）と（と）天（てん）地（ち）へ（へ）皈（か）せ（せ）ざる（ら）ふ（ら）の（の）稀（まれ）ふ
 形（かたち）と（と）入（い）り（り）と（と）あり（あり）世（よ）の（の）こと（こと）と（と）幽（ゆう）霊（れい）と（と）入（い）り（り）七（しち）四（じゅう）九（じゅう）日（にち）あり（あり）。鬼（おに）魄（はく）全（ぜん）く（く）な（な）ら（ら）ず
 其（その）の（の）幽（ゆう）霊（れい）ど（ど）も（も）あり（あり）と（と）あり（あり）。其（その）の（の）後（のち）怪（あや）異（ま）と（と）あり（あり）の（の）い（い）の（の）陰（かげ）歎（なげ）か（か）不（ふ）為（ゐ）る（る）
 と仰（おほ）す（す）の（の）他（ほか）坊（ぼう）の（の）後（のち）さ（さ）と（と）あり（あり）。さ（さ）ふ（さ）於（お）て（て）心（こころ）棄（す）る（る）の（の）宗（しゆ）あり（あり）ぬ（ぬ）と（と）言（い）ふ（ふ）の（の）意（い）を（を）察（さつ）せ（せ）り（り）。其（その）の（の）心（こころ）
 を（を）針（はり）で（で）あ（あ）と（と）い（い）ま（ま）と（と）候（ま）り（り）も（も）終（は）ら（ら）ぬ（ぬ）の（の）方（かた）より（より）一（いち）陣（じん）の（の）怪（あや）風（かぜ）颯（さつ）と（と）吹（ふ）き（き）。傾（かたむ）き（き）
 入（い）り（り）と（と）軒（のき）の（の）簷（えん）類（るい）と（と）あり（あり）の（の）音（ね）あり（あり）。兩（りやう）個（こ）の（の）破（やぶ）聲（こゑ）と（と）あり（あり）。又（また）様（さま）へ（へ）と（と）候（ま）り（り）と（と）候（ま）り（り）
 と窺（うかが）ひ（ひ）けり（り）

忠勇阿佐倉日記初輯卷之一畢

